『教育学術界』文学作品・文芸関連記事目録（明治三二～大正二年）

出木良輔

【はじめに】

明治三二年一一月に同文館より創刊された『教育学術界』[1]は、発行元を大日本学術協会（三八―四、大正八年一月～）[2]、モナス（四九―一、大正一三年三月～）[3]に移しながらも昭和一四年一〇月（八〇―一）まで発行を続けた、きわめて息の長い教育雑誌である（七九―二、昭和一四年五月以降は誌名を『教学』に改めている）。創刊号（一―一、明治三二年一一月）に掲載された「発行趣意書」の冒頭を以下に引用する。

学理なき実験は羅針なき船の如く、実験なき学理は空中の樓閣の如し。近来我邦の教育界を見るに、実験的研究の野は百花爛漫の観ありといへども、学理探検の道は荒涼寂寞の歎なきあたはず。之を雑誌界に徴するも、教育壇の廃刊せられてより、幾十の教育雑誌中、一の学理研究を任とするものなし。豈に盛世の欠点にあらずや。此の欠点を補はむために熱心なる同志と協力して、精妙なる教育の学理を研究せむことは、本会第一の希望なり。

さらに「第二の希望」としては「泰西の新研究を、成るべく早く、成るべく広く、抄訳し評論して、世に紹介せむこと」、そしてその上で「我国に適切なる教育を研究せむこと」が「第三の希望」として挙げられている。

平成に入って以降、復刻版（大空社、平成一～一〇年）の刊行や、一〇〇誌以上に及ぶ戦前の教育雑誌の総目次をまとめた教育ジャーナリズム史研究会編『教育関係雑誌目次集成』（日本図書センター、平成五年八月）の刊行により、『教育学術界』掲載記事の閲覧や整理は困難ではなくなっている。この雑誌の詳細な書誌的情報については小熊伸一の優れた解説[4]が存在するためそちらに譲ることとして、ここで中心的に取り上げたいのは、この雑誌に小説や詩歌などの文学作品や、文芸に関連する記事が数多く掲載されていた事実だ。

先に引用した「発行趣意書」の末尾には「社説」「論説」「学理」「応用」「時言」「紹介」「雑録」「応問」「彙報」という計九つの欄のそれぞれの概要が記載されているのだが、小説などの文学作品が掲載されてゆく「雑録」欄には「教育的文学、伝記、発見等」（傍点引用者）の「載録」がその趣意として掲げられている。この記述からは、『教育学術界』が創刊当初から「教育的文学」なるものの掲載に意識的であったことが見て取れよう。

ちなみに明治三五年頃にはこの「雑録」欄から「文芸史伝」欄が独立し、明治三八年からはさらにそれが「文芸」欄と「史伝」欄に分裂

するのだが、主としてこの「文芸史伝」欄と「文芸」欄が創作小説や詩歌などといった文学作品や文芸関連記事掲載の場として機能してゆくこととなる。

これらの記事についても概観しておく。この雑誌には創刊当初から読者投稿による詩歌がしばしば掲載されているが、明治三五年以降は中内蝶二[5]や河井咀華[6]、久保天随[7]、天野淡翠[8]、菊池暁汀[9]、長谷川濤涯[10]らの小説が目立つ。現在ほぼ顧みられることのない書き手である彼らの創作活動の受け皿として教育雑誌というメディアが機能していた点には注目されよう。

ところで彼らは一見するといずれも教育界とさほど関わりの深くない書き手だが、例えば中内蝶二は『文芸倶楽部』編集主任時代に「健全なる小説」（『文芸倶楽部』明治三四年七月）を同誌に掲載し、その中で「社会人生の不健全なる暗的方面」「理想を以て醇化」した「健全なる小説」の必要性を説いている。こうした「健全なる小説」への志向が[11]、『教育学術界』が発信する教育の言説と親和性の高いものであったことは想像に難くなく、中内蝶二「寒梅」と共に明治三五年の「新年附録」として掲載された「家庭訓話初嵐」（四―二三、明治三五年一月）の冒頭にもやはり「我国に於いては、良き家庭に於いて、父母が其子女に談話する材料が甚だ乏し」く、「故に本会では、今後よき材料を集め、之を誌上に掲げて、この欠乏を補ふ考である」という付記がなされている。こうした事実を踏まえるならば、『教育学術界』掲載小説の書き手たちに共有されていた思想性を抽出することも可能かもしれないが、ここではそうした議論に入り込むことは避ける。

また、後に『少女世界』主筆を務め、少女小説や女子教育論を数多く発表した教育家の沼田笠峰[12]も、記者として同誌の編集に携わる傍らで小説やエッセイをしばしば寄せていたようだ。『お伽倶楽部』幹事の天野雉彦[13]による小説やエッセイ、童話類の掲載も同じく数多い。

『教育学術界』に創作・翻訳小説が本格的に掲載され始めるのは「新年付録」として中内蝶二「寒梅」と「家庭訓話初嵐」、「明治三十四年教育小史」が掲載された四―三（明治三五年一月）からだが、こうした文学作品に誌面を割く同誌の誌面構成は読者にも好評を得ていたようで、五―六（明治三五年九月）の巻末には以下のような次巻予告が付されている。

多数の読者中、殊に永年に渉れる読者中には、本誌について、一増拡張すべきことを勧告せらるゝ読者多く、其言要するに、一巻の首尾理論を以て満たさるゝ傾きあれば、なほ教授管理の実際的方面を加へ、併せて文学美術に関するものを増加せよとの要求なり。本会も亦従来其感なきにあらざりしかば、今回多数読者の希望を納れ、なほ併せて各欄とも多少の変更改良をなさんとす。（中略）

文芸史伝　この欄を拡張して、趣味多きものたらしめんとす。

見ての通り、ここでは「多数読者の希望」を受けて次巻以降「各欄記事の上に聊か改良を加へんとす」ということが予告されているのだが、ここで実際に多くの読者の声として挙げられているのが「文学美術に関するもの」の充実を求める意見であることには注目して良い。「拡張」が予告されている「文芸史伝」欄が文学作品掲載の場であったことは先述の通りで、実際にこの号以後は文学作品や文芸関連記事の掲載が目に見えて増加している。

注目すべき書き手としては、「井川天籟」や「鈴掛次郎」の名で小

説を数多く寄せた井川（恒藤）恭（明治二一～昭和四二年）[14]の名を挙げることが出来るだろう。井川恭は特に中学・高校時代、先の筆名を用いて『教育学術界』や『小学校』、『中学世界』等に頻繁に投稿を行なっていた。一高時代に親友となった芥川龍之介の才能は最終的に井川を文学の放棄へと向かわせてゆくのだが、彼と芥川の交流を考えてゆく上でも『教育学術界』の掲載小説は興味深い。例えばアナトール・フランスの翻訳「バルタザアル」（二七―五、大正二年八月）は、後に芥川も翻訳している小説である。この雑誌に多数掲載された井川恭の小説群は、青年時代の彼の創作活動のありようを示す重要な資料になると同時に、芥川研究においても参照される価値があるだろう。

またこの雑誌はしばしば、同時代の文芸に関するエッセイや時事的な評論文を掲載してもいる。中でも明治三七年には白鳥生（はくてう）による「文芸雑録」「片々録」といった文芸時評[15]が掲載されている点は重要である。このような記事は同時期の他の教育雑誌には管見の限り見出されず、このような記事の掲載が『教育学術界』に文芸雑誌的な傾向を付与していると言える。他に文芸に関する論説やエッセイの類を同誌に寄せている文化人・文学者としては徳富蘇峰や上田敏、長谷川天渓、久保天随、中村春雨、島村抱月、水野葉舟、泉斜亭[16]等の名が挙げられる。

明治四〇年前後には「文芸と教育との調和」（一六―五、明治四一年二月）や「小説と教育」（一七―一、明治四一年四月）等と題する記事が目立つが、このことは当時活性化しつつあった自然主義文学の影響力が教育界にも及んでいた事実を示している。当時の自然主義文学については「所謂自然主義」（一六―四、明治四一年一月）、「自然主義の小説」（一六―六、明治四一年三月）といった論説の中でも議論が展開されている。

他にも明治四二年一〇月（二〇―二）には「社会教育の研究」特集が創刊十周年記念として組まれ、当時の文部大臣である小松原英太郎や哲学者の井上哲次郎らに加えて幸田露伴や島村抱月の論説が掲載されている。幸田露伴はここに掲載された「文芸と芸術と」と題する文章の中で「教育と文芸とは切断しきれない関係を有して居るもの」であると述べ、「国家主義の教育」と「個人主義の文芸」が融和を図る必要性を説いている。こうした議論が生田葵山「都会」裁判事件（明治四一年）を一つの契機として活発化していたことは言うまでもないが、文芸と教育をめぐる以上のような言説は当時の自然主義文学受容の諸相を探る上でも興味深い。

その他、三浦圭三[17]や藪重臣[18]らを含めた一般の教員読者、あるいは麻山紫葉や岡村紫峰、吉田笠雨といった詳細がそれほど明らかでない書き手たちによる記事の存在も看過出来ないと共に、彼らについての調査も課題となるだろう。その上で個々の作品を詳細に読み込んでゆくことの重要性については言うまでもない。また、以上のような書き手の多くは同文館が明治三九年四月に創刊した教育雑誌『小学校』にも頻繁に記事を寄せているため、この二つの雑誌の連続性や差異についても検討する必要があろう。

上記の小説群についてはこれまでにいくつかの拙稿で分析を行なってきたので[19]、そちらをご参照いただきたい。本目録は、以上のように『教育学術界』が創刊当初から「教育的文学」の掲載を意識していた事実や、そこに寄稿していた人々と掲載記事の情報を概観した上で、

同誌に掲載された文芸関連記事を整理することで、教育メディアをめぐる文化史的な研究の基礎となるデータを提供することを目的としている。このような作業は、近代日本の教員たちを取り巻く文化やメディアのありようを浮き彫りにしてゆくこと、あるいはそこにおいて特に「文学」という文化形態が担わされていた役割や価値を捉えてゆくことに繋がるはずである。

紙幅の関係もあり、今回は目録の範囲を大正二年までに留めたが、以降も同誌は数多くの文学作品や文芸関連記事を掲載している。これらについても今後継続して収集・整理し、公にしてゆく予定である。

注

(1) 『教育学術界』については巻号を「巻―号」という形で略記する。

(2) 大正初年に『教育学術界』主幹を務めていた尼子止によって大正五年に設立。大正一〇年八月には大正自由教育運動期の象徴的な出来事である八大教育主張講演会を主催し、翌年には尼子止編『八大教育主張』（大日本学術協会、大正一一年一月）として書籍化・発行している。

(3) 同じく尼子止により設立された出版社。教育関係の書籍を数多く出版した。

(4) 小熊伸一「雑誌『教育学術界』解説」（寺崎昌男監修『教育学術界　解説』大空社、平成三年六月）

(5) 本名は中内義一（明治八～昭和一二年）。明治三三年に東京帝国大学を卒業後大町桂月の紹介で博文館に入社、明治三四年には『文芸倶楽部』編集主任となり、同誌の時文欄を担当する傍らで小説「難破船」（『太陽』明治三四年二月）等を発表。その後明治三八年には『万朝報』に移り、劇評を担当しながら小説や劇作、さらには邦楽の作詞活動を行なった。

(6) 本名は河井英三（明治一四～四〇年）。寺本喜徳編著『河井咀華美文選』（島根国語国文会、平成七年五月）によれば、『教育学術界』に多くの記事を寄せていた明治三〇年代後半には、郷里で発行されていた『山陰新聞』の社友として〈山陰文壇〉欄を担当していた他、明治三八年からは雑誌『新声』（隆文館）記者として活動していたという。明治三九年には長編小説「綱手縄」が『大阪朝日新聞』の懸賞小説として入選している。

(7) 本名は久保得二（明治八～昭和九年）。漢学者、漢詩人、評論家。ちなみに先述の河井咀華は久保天随と大町桂月に師事している。

(8) 本名は天野寿太郎（明治一三～大正五年）。『福岡日日新聞』記者。原田種夫『黎明期の人びと―西日本文壇前史』（西日本新聞社、昭和四九年一二月）によれば、「明治三十七年十一月一日に福日に入社した人だが、熊本高工に学び、早大文科を卒業している。」「性情淡、酒を嗜み、文をよくし、詩を楽しんだ。社命で東海道五十三次旅行をし、大正四年七月十日―九十二回、その旅行記を連載した。かつて、田山花袋と英詩を共訳出版したこともあり、四十四年ごろは地方欄主任。大正五年六月二十四日、チフスで病死した。享年三十六歳であった」。河井咀華との共著である『教師之妻』（教進社、明治三七年一月）は教育界において好評を博したようで、『教育学術界』にもその書評が寄せられている。かさみね生「「教師の妻」を読む」（八―六、明治三七年二月）参照。

(9) 本名・生没年不詳。教育雑誌に小説を投稿していた他、彼の手による『魔風恋風之詩』（盛光堂、明治三九年一〇月）の存在も確認できる。また、『家庭小説 悲恋悲歌』（大学館、明治四〇年一二月）という所謂「家庭小説」等も発表していたようである。

（10）本名は長谷川善作（生没年不詳）。明治三〇年に中村春雨と共に広津柳浪に入門し文筆業を営んでいたが、明治三四年頃に大阪に西下。大阪駸々堂発行の文芸雑誌『小柴舟』の編集人を務めた。

（11）「家庭」のための「健全」な小説なるものを待望する言説が、明治二〇年代後半の観念小説・悲惨小説等の流行等に対するカウンターとして明治三〇年代に盛んに生産されていたことは鬼頭七美『「家庭小説」と読者たち　ジャンル形成・メディア・ジェンダー』（翰林書房、平成二五年三月）の指摘に詳しい。

（12）本名は沼田藤次（明治一四～昭和一一年）。笠峰の作品は、近年では「少女小説」というジャンル形成の展開を追う中でしばしば取り上げられてきている。久米依子『「少女小説」の生成　ジェンダー・ポリティクスの世紀』（青弓社、平成二五年六月）、塩屋知里『『少女世界』の少女表象―主筆沼田笠峰の小説分析から―』（『近代文学試論』平成二五年一二月）等参照。

（13）明治一二～昭和二〇年。島根県で小学校教員を経た後明治三八年に上京、久留島武彦の『お伽倶楽部』に参加し、久留島と坪内逍遥に師事した。

（14）現在でこそ法哲学者恒藤恭として世に知られているが、彼が恒藤姓を名乗るのは恒藤まさと結婚し恒藤家の婿養子となる大正五年以降のことである。そのため以下では同時代の文脈を重んじ、「井川恭」と記した。彼の伝記的事項については関口安義『恒藤恭とその時代』（日本エディタースクール出版部、平成一四年六月）、山崎時彦『若き日の恒藤恭』（世界思想社、昭和四七年一月）およびその増補改訂版『恒藤恭の青年時代』（未来社、平成一五年一一月）等参照。

（15）注１９①では、これらを正宗白鳥によるものと推測した。正宗白鳥がほぼ同時期に同題の文芸時評を『読売新聞』に掲載していたためである。

（16）本名は泉豊春（明治一三～昭和八年）。泉鏡花の実弟。

（17）明治一八年生、没年不詳。佐治尋常小学校で代用教員として奉職する傍らで英語やドイツ語を独学した。大正一一年には弘前高等学校教授に就任。「蛍雪の功」（『丹波新聞』平成二二年三月一日）参照。

（18）明治一六～昭和三三年。藪紫影、藪白明（薄明）等の筆名も用い、三重で中学校教員として奉職する傍ら『文庫』や『新声』に詩の投稿も行なっていた。藤田福夫「「文庫」「新声」の詩人藪紫影」（『杉山女学園大学研究論集』昭和五四年三月）に詳細な年譜が付されている。

（19）『教育学術界』に掲載された文学作品ならびに文芸関連記事を対象とする拙稿は以下の通りである。

①「教育雑誌『教育学術界』の〈文学〉と青年教員―中内蝶二「寒梅」をめぐって―」（『国語教育論叢』平成二七年二月）

②「教育雑誌と〈女教員〉の大正―「理想の女教員」をめぐって―」（『日本文学』平成二七年二月）

（でき　りょうすけ、広島大学大学院博士課程後期在学）

【目録】

凡例

一、教育ジャーナリズム史研究会『教育関係雑誌目次集成』第Ⅰ期　教育一般編（日本図書センター、平成五年八月）および広島大学に所蔵されている、大空社からの復刻版『教育学術界』（一―一～二八―六）をもとに作成した。

一、筆者名は目次および記事内の表記を優先し、雅号やペンネームが判明している場合は現在一般に知られる筆者名を［　］内に記した。また、筆者の居住地や職業が記事内や目次に記されている場合はそれを（　）内に記した。筆者名の欄が空白のものは無記名の記事を示す。

一、角書は〈　〉内に記した。

一、旧漢字は原則として現行のものに改めた。

『教育学術界』文学作品・文芸関連記事目録（明治三二～大正二年）

発行年	月-日	巻-号	筆者名	タイトル	ページ
明治33（1900）	1-3	1-3	徳富猪一郎［徳富蘇峰］	言語文字と文章との関係	43-48
	12-3	2-2		不健全なる読書界	53
明治34（1901）	11-5	4-1	梅園	聖徳	84-85
			紫白	秋の一日	86-87
			(美濃) うた子	夢想小学校	88-89
			梅園	遠足会	89-90
			永鱸江	米国の大教育家マン氏	90-94
明治35（1902）	1-1	4-3	梅園	教育に因ある梅の歌	114
			彬延	『マルザ』の幻影	115-117
			(文学士) 中内蝶二	寒梅	付　録 1-14
				〈家庭訓話〉初嵐	付　録 14-26
	2-5	4-4	(独国文豪) ハウフ	〈家庭訓話〉幽霊船	102-109
			(子爵) 福羽美静	近詠	109-110
			なはゝみ訳	機会！	110-111
	3-5	4-5	(文学士) 紅於生	山鹿素行と赤穂四十七士	87-91
				星学者ガリレオ	91-93
			咀華生	白薔薇物語	93-97
			(子爵) 福羽美静	明治三十四年の頃	97
	4-5	4-6	(子爵) 福羽美静	一夢の記	85-87
			咀華生［河井咀華］	白薔薇物語	90-97
	5-5	5-1	咀華生［河井咀華］	白薔薇物語	101-103
			簸川漁史	学校生活	103-106
	6-5	5-2	(子爵) 福羽美静	一夢の記	92-95
			簸川漁史	学校生活	97-103
	7-5	5-4	(文学士) 長連恒	仮名手本忠臣蔵	91-96
			簸川漁史	学校生活	97-100
			痩咀華生［河井咀華］	青葉衣	100-101
	8-5	5-5	(文学士) 春風生	回想記（其一節柿の木）	81-82
	9-5	5-6	(文学士) 柴舟	「チヤールス川に」（Long fellow）	62-63
	10-5	6-1	咀華痩客［河井咀華］	軽颺集	95-96
	11-5	6-2	(文学士) 中内蝶二	神経病	91-93

明治35（1902）	11-5	6-2	長谷川天渓	露国文豪マキシム・ゴルキー	93-97
			（文学士）長連恒	太申小伝	98-100
			幽渓	舞子の浜	100-102
	12-5	6-3	（文学士）久保天随	古松軒	79-85
			河井咀華	先生像	85-91
			籔川漁史	学校生活	91-94
明治36（1903）	1-1	6-4	（文学士）久保天随	古松軒	83-88
			河井英三［河井咀華］	先生像	92-98
			（島根）井蛙道人	手まり歌	98
	2-5	6-5	（文学士）上田敏	ブラウニングの宗教詩	81-82
				瞻望	82
			長谷川天渓	中古主義の勝利	82-88
			（文学士）久保天随	古松軒	88-91
			（文学士）中内蝶二	神経病	91-93
			みうら	平泉遊記	93-96
			井上鰐淵	手まり歌	96
	3-5	6-6	（文学士）中内蝶二	神経病	94-96
	4-10	7-2	天野淡翠	〈小説〉つゞれの錦	87-91
			天随［久保天随］	文界妄言	95-98
			楚化生	寸言碎語	98-99
	5-5	7-3	天野淡翠	〈小説〉つゞれの錦	85-91
	6-5	7-4	記者	読書界の慶ぶべき徴候	90
			記者	文界妄言	92-95
	9-5	8-1	河井英三［河井咀華］	上代思想に於ける迷信	90-93
	10-5	8-2	河井英三［河井咀華］	上代思想に於ける迷信	85-87
			天随［久保天随］	文人の志	103-106
	12-5	8-4	吉田笠雨	〈小説〉銀杏落葉	88-95
			天随［久保天随］	紅葉山人を悼む	106-110
			笠峯生［沼田笠峰］	野の叫び	114-116
明治37（1904）	1-1	8-5	河井咀華	紅梅白梅	94-96
			大島三千里	越後の奇勝（五十嵐川水源探検）	96-99
				文人の噂	99
			笠峰生［沼田笠峰］	平凡なる言	112-115
	2-5	8-6	河井咀華	芸術の根	77-81

明治37（1904）	2-5	8-6	かさみね生［沼田笠峰］	教師の妻を読む	81-84
				人づて	84
			笠峰生［沼田笠峰］	経験と希望と	106-107
	3-5	8-7	はくてう	文芸雑録	92-93
			河井咀華	〈小説〉月光	93-97
			笠峰生［沼田笠峰］	回顧せよ予想せよ	111-112
	4-5	9-1	はくてう	美術界の今日	97-100
			笠みね生［沼田笠峰］	花爛漫	115-116
	5-5	9-2	白鳥生	新体詩朗読会と音楽会	77-78
			白鳥生	片々録	78-79
			大島三千里	匂ふ花の旅の日記	79-81
			笠みね生［沼田笠峰］	猛省せよ教育者!!!	119-121
	6-5	9-3	白鳥生	片々録	104-105
			笠峰生［沼田笠峰］	教師の興味	109-110
	7-5	9-4	沼田笠峰	螢狩	92-93
			白鳥生	片々録	93
	8-5	9-5	記者	戦争、教育、小説	98-100
			笠峰生［沼田笠峰］	木蔭のさゝやき	107-109
	9-5	9-6	白鳥生	時事雑感	91-94
	10-5	10-1	白鳥生	時事雑感	96-97
	12-5	10-3	笠峯生	燈火親しむべし	95-96
明治38（1905）	1-1	10-4	（東京）山田翠東	紅舌録	78-81
			（沼津）北濤漁夫	ひなぶり	81-82
			（東京）四面楚歌生	紛々録	82-85
	2-1	10-5	（沼津）北濤漁夫	ひなぶり	89-90
	4-5	11-1	河井咀華	〈小説〉利己主義	72-75
	7-5	11-4	沼田笠峯	〈小説〉心霊の交換	79-86
	8-5	11-5	浩濤	〈小説〉人の子	80-83
			北濤漁夫	ひなぶり	83-84
	10-5	12-1	（東京）老兵衛	〈教育資料〉兵士の生活	106-110
	11-5	12-2	（東京）老兵衛	〈教育資料〉兵士の生活	104-106
	12-5	12-3	（東京）老兵衛	〈教育資料〉兵士の生活	105-107
明治39（1906）	1-5	12-4	（東京）老兵衛	〈教育資料〉兵士の生活	100-103
	3-5	12-6	（文学士）上田敏	文芸雑話	90-93

明治39（1906）	3-5	12-6	(兵庫県)三浦圭三	吾輩は猫であるを読む	102-104
			(東京)老兵衛	〈教育資料〉兵士の生活	108-111
	4-5	13-1	(文学士)上田敏	文芸雑話	80-82
	6-5	13-4	(東京)老兵衛	〈教育資料〉兵士の生活	110-111
				男女学生の読み物	81
	8-5	13-6	(日本の家庭記者)沼田笠峯	唖のおみち	71-74
			(東京高等師範教授　文学士)桑原隲藏	消夏漫録	74-78
			岡村紫峰	教育者と娯楽	99-101
			記者	文書図書の選択	107
	9-5	13-7	(東京高等師範教授　文学士)桑原隲藏	消夏漫録	73-77
	10-5	14-1	(鳥取県第二中学校教諭)高田宇太郎	〈中学生徒〉科外の読物	83-86
	11-5	14-2	記者	読物の選択に関する説明	101
			記者	家庭の読み物	101-102
明治40（1907）	4-5	15-1	(徳島県視学)中垣安太郎	教育者の読書に就て	74-76
			(姫路師範学校附属小学校主事)三浦修吾	予の愛読書	79-81
	6-5	15-3	(東京)召水漁史	〈教育小説〉高僧の感化	84-88
	7-5	15-4	(東京)麻山紫葉	七夕祭	80-84
	8-5	15-5	(東京)麻山紫葉	〈教育小説〉年功	71-78
			(文学博士)芳賀矢一	大町桂月と教員検定試験	78-79
	9-5	15-6	沼田笠峰	書物の追憶	85-87
			(東京)岡村紫峯	小説「棄石」を読む	88-92
	10-5	16-1	(東京)抱懈生	〈小説〉寂寥	63-70
	11-5	16-2	KTN	近時の小説	52-58
	12-5	16-3	抱懈生	〈東京西郊〉汽車の窓	61-65
明治41（1908）	1-1	16-4	(東京)沼田笠峯	屠蘇漫言	75-80
			(東京)渡邊孤帆	孝貞なる嫁君	80-88
			記者	所謂自然主義	114-115
	2-5	16-5	無記名	文芸と教育との調和	1-3
			(東京)召水漁史	〈小説〉舊職	68-74
	3-5	16-6	無記名	自然主義の小説	2-3

明治41（1908）	3-5	16-6	(東京)菊池暁汀	〈小説〉愁人	76-80
	4-10	17-1	(文学博士法学博士　男爵)加藤弘之	小説と教育	20-22
	6-10	17-3	(東京)麻山紫葉	〈小説〉雀の子	94-99
	7-10	17-4	(東京)抱解生	煩悶	87-90
	8-10	17-5	(東京)紫葉生	〈小説〉悪縁	93-98
	9-10	17-6	(東京)笠峯生	信濃紀行	75-81
			(埼玉県北足立郡指扇村実業補習学校)石野石録	〈小話〉毒草	82-84
			(東京)天野雉彦	信濃土産	84-89
	10-10	18-1	(東京)門外郎	文壇垣のぞき	86-90
	11-10	18-2	(東京)天野雉彦	都会より田舎へ	78-82
明治42（1909）	1-10	18-4	(東京)沼田笠峯	とりゞゝ草	104-110
			(お伽倶楽部幹事)天野雉彦	〈教育夜話〉子供と狼	110-115
			記者	一月の読み物	130
	2-10	18-5	(東京)沼田笠峯	沼津だより	74-79
			(埼玉)石野石録	角兵衛獅子	79-81
	3-10	18-6	(東京)笠峯生［沼田笠峰］	沼津だより	109-113
	4-10	19-1	(東京)菊池暁汀	〈小説〉電車の中	78-80
	7-10	19-4	(東京)沼田笠峯	天真爛漫	81-84
	8-10	19-5	(東京)笠峯生［沼田笠峰］	夏の思ひ	85-88
			(鹿児島中学校)尾島直治	ジョン、カルヴキン	88-91
	9-10	19-6	(東京)中山蕗峯	歓会	72-77
	10-20	20-2	(文部大臣)小松原英太郎	少年及青年の読み物に就て	53-56
			(文学博士)井上哲次郎	社会教育上より見たる芸術	56-67
			(著述家)幸田露伴	文芸と教育と	67-69
			(著述家)島村抱月	文芸と社会教育	70-71
	12-10	20-4	(東京)川口梧葉	火影	73-79
明治43（1910）	1-10	20-5	(お伽倶楽部幹事)天野雉彦	犬物語	70-76
			沼田笠峰	八王子の一日	76-81
	2-10	20-6	(東京)菊池暁汀	〈小説〉村の青年	85-89
	6-10	21-3	(早稲田大学講師)島村抱月	現代の国民は何に拠りて趣味の飢渇を癒すべきか	66-69
	8-10	21-5	(文学士)中野徹軒	生の謎	67-72

明治43（1910）	8-10	21-5	(東京)天野雉彦	夕立	73-79
	9-10	21-6	(文学士)中野徹軒	生の謎	78-81
	10-10	22-1	揺曳生	青年時代	63-66
明治44（1911）	1-10	22-4	(東京)天野雉彦	松飾	70-74
	2-10	22-5	(東京)沼田笠峯	〈小説〉村の住人	71-73
	5-10	23-2	(東京)川口悟葉	郊外生活	65-74
			岡村直吉	児童課外読物につきて	87-92
	6-10	23-3	(富山県師範学校訓導)岡村直吉	児童の課外読物に就て	94-97
	8-10	23-5	(文学士)重田定一	杏坪先生	76-
			(東京)葉山繁樹	〈小説〉悟	80-83
	9-10	23-6	長谷川濤涯	〈小説〉寂光	75-79
			(文学士)重田定一	杏坪先生	79-83
	10-10	24-1	(長崎県佐世保中学校教諭)末岡作太郎	葉陰	76-80
	11-10	24-3	(文学士)若月紫蘭	秘密の血	65-69
			(文学士)重田定一	賴杏坪	69-72
	12-10	24-4	(文学士)重田定一	賴杏坪	71-74
明治45（1912）	1-10	24-5	長谷川濤涯	〈小説〉呪はれたる処女	63-67
	2-10	24-6	(東京)井川天籟［恒藤恭］	ニムフの歌	68-73
	3-10	24-7	(国民新聞主筆)徳富蘇峯	贈従四位中谷正亮	70-73
	4-10	25-1	(東京)井川天籟［恒藤恭］	跳る浪	66-69
	5-10	25-2	(東京)井川天籟［恒藤恭］	跳る浪	79-81
			(東京)中村春雨	西比利亜鉄道旅行日記	76-79
	6-10	25-3	(東京)長谷川濤涯	〈小説〉落伍者	83-87
	7-10	25-4	(文学士)小林愛雄	世界文芸物語	61-66
			(東京)篠懸二郎	くるみ拾ひ	66-69
			(東京)泉斜亭	すゞみ台	69-71
			(三重県第一中学校教諭)藪重臣	課外読物の調査及指導	84-90
	8-10	25-5	(文学士)小林愛雄	世界文芸物語	62-66
			(文学士)若月紫蘭	手術の後	66-74
大正1（1912）	9-10	25-6	(東京)井川恭［恒藤恭］	二先生	68-74
			(東京)江尻河一	雛鶯	74-78
	10-10	26-1	(文学士)小林愛雄	犠牲	68-77
	11-10	26-3	(東京)天野雉彦	〈趣味口演〉お仙泣かすな馬肥やせ	65-70

大正１（1912）	12-10	26-4	(東京)鈴かけ次郎［恒藤恭］	空白の一点	65-69
			日野橄欖樹	「リーンハールドとゲールトルード」を読みて	69-71
大正２（1913）	1-10	26-5	(萬朝報記者)大倉桃郎	僕と時計	62-67
			(東京)長谷川濤涯	〈小説〉皮肉会	69-72
	2-10	26-6	(東京)宮城露香	〈小説〉低能児	71-77
	3-10	26-7	(東京)宮城露香	〈小説〉日蔭の春	73-78
	4-10	27-1	(東京)鈴掛次郎［恒藤恭］	レエタ・アキリア	71-77
	5-10	27-2	(東京)沼田笠峰	教壇の友に	77-81
	6-10	27-3	(東京)沼田笠峰	教壇の友に	79-84
			(文学士)船越文教	中学生と父母師友の感化及其読物と愛誦の格言	63-66
	7-10	27-4	(東京)沼田笠峰	教壇の友に	72-75
	8-10	27-5	(東京)鈴掛次郎［恒藤恭］	バルタザアル	72-82
	9-10	27-6	(東京)沼田笠峰	郊外より	72-78
			(東京)鈴かけ次郎［恒藤恭］	上京	78-84
	10-10	28-1	(東京)鈴かけ次郎［恒藤恭］	上京	66-72
	11-10	28-2	(東京)鈴かけ次郎［恒藤恭］	上京	72-78
			(文学士)小林愛雄	現代文芸の潮流	63
	12-10	28-3	(東京)鈴かけ次郎［恒藤恭］	上京	78-85